

神経の難病「パーキンソン病」の進行抑制に、音楽やゲームなどでストレスを解消するリハビリが有効であることが、国立病院機構徳島病院（吉野川市鴨島町敷地）の専門リハビリセンターの研究で分かった。センターの入院患者に

リハビリを実施し、退院時に重症度を示す数値を測定したところ平均で入院前の3分の2に改善していた。神経難病の心理的ストレスに注目したリハビリは全国的に珍しく、20日に東京で開かれる日本神経学会で発表される。

パーキンソン病

ストレス解消が有効

音楽鑑賞・ゲームで運動



ゲーム機を使ってリハビリに取り組む患者ら。ストレス解消が進行抑制に有効なことが分かった＝2009年6月、吉野川市鴨島町の徳島病院

センターは症状の軽い患者を対象で、昨年4月に開設。4週間の入院期間中、家庭用ゲーム機を使った運動やグラウンドゴルフ、音楽鑑賞など患者一人一人に合わせて実施したメニューに取り組んでいる。昨年度は36人が利用し、途中退院した患者らを除く60、80代の26人を対象に効果を分析した。

その結果、症状の程度を複数の項目で評価する

徳島病院調査 重症度 大幅に改善

このため、センターで立したいと話している。

具体的には、手助けな者を対象にした長期入院して歩けるようになったり、前かがみの姿勢が直り自分で食事を取れるようになったりした。たに多量の治療という新たな、退院後もリハビリを観点からの試みだった続けなければ、再び数値が、予備以上の手控え、今か悪化する」とも明らか、後は薬物療法がリハビリを立立させた治療法を確

値は入院前と比べて全体は、退院した患者のリハ的に改善。中でも運動機ビリ意欲を高める教室を能の値は、平均31・3が昨年10月から開いている同21・7へと大幅に好。本年度は入院期間を転した。数値が3分の2に5週間に延ばし、最後のにまで減少するのは、薬選は自らできるメニュー物療法による特効薬の効一を患者と一橋に考えて里に匹敵するとい。病気が進行した患者を

パーキンソン病 脳内で神経伝達物質のドーパミンが不足し、手足の震えや動作が緩慢になる症状が徐々に進行する病気。10万人に150、200人の割合で発症するといわれ、県内の患者は1千人以上とされる。